

ぐらまで拘置所にて、当時の大阪拘置所は冷暖房がないので、11月の終わりぐらいになると、壁際に寄るとひんやり冷たいです。さすがに呑気な私も、真冬をここでは越したくないなど。何とかお正月前に出られないかなと思ひながら、正月をここで過ごしたいという夏に聞いた検事の言葉を思い出しました。

こんなところで、ここより寒いところにいるわけ。おせちどうすんの。刑務所の食事は、とっても健康的で、3食学校給食が出ると思ってもらって一番イメージにぴったりだと思うのですが、ちゃんと季節のものができます。今ぐらいに、さんまの塩焼きが出たときには本当に感動しましたが、もしかして、ここだったらおせち出るのかな、年越しそば出るのかなという。クリスマスケーキは出ないかなと思ひましたが、外にいたら食べられない、そういう人たちなのかなと思ひました。

私、ちょっと皆さんに笑われそうですが、あまりにもそれが知りたくて、出所した後で法務省に問い合わせをしました。刑務所ではおせちが出るでしょうかと問い合わせをしたら、本当に質素なものですけど、おせちが出るそうです。

データをその後見て、刑務所の中には高齢者が多い。それから、いわゆる知的障がいにあたる人たちが5人に1人ぐらいはいる。ボーダーラインの人はもっとたくさんいる。そして、私一番腹が立った統計が学歴です。

左側の、入所している受刑者のブルーのところは男性ですが、一番多い学歴が、中卒以下。中卒以下という表現を私達普通の世界では見ないですよね。でも中卒以下で始まります。その次が高校中退でその次が高校卒業で、わずかですが大卒がいるという状況。

私はやっぱりすごく偏見があつて、悪い奴、ずる賢い奴が刑務所にいるのではないかと思ひていたのですが、刑務所に入ってたくさんの受刑者とすれ違ふと、福祉の施設と景色は非常によく似ているし、データで見ても、結局、ハンディキャップを持っている人がこんなにたくさんいるのだということが分かりました。

嫌な言葉ですけど負の回転扉という言葉があ

つて、悪い事をする、刑務所に入れられる、お勤めを終えて刑務所の外に出る、自分の背中後ろで刑務所の門が閉まる。

今ここに立っているところがどこか、困った状況で犯罪を起こして、刑務所に行った人がまた1人で刑務所の門の外に立たされてバイバイと言われるだけだったら、結局、すぐろくの振り出しのところに帰ってきているだけ。また困って、罪を犯して、ぐるぐると回って刑務所に帰ってくる。負の回転扉と言われており、そんな状況だと言われています。そういうものを見てしまったので、その後、小さい市民活動を始めました。これでまたたくさんのお話を勉強しました。

一つは累犯障がいと呼ばれている障がいがあるがゆえになかなかうまくいかなくて、犯罪に手を染める人たちがそれを繰り返すを防ぐ、そのための活動をしようということで小さな基金を作つて、調査や広報活動、それから草の根活動する団体の小さな助成金ということを始めしています。

それからもう一つが若い女の子たちを見てしまったので、薬とか売春というところにつながる前に、支援とつながるようにしたいといつて、若草プロジェクトというのを始めました。

この活動ももう8年目、基金の活動はもう12、3年になりますけど、こういうことをずっとやっています。若草の方は特に亡くなられた瀬戸内寂聴先生が「私達やり残していること何かあるんじゃないの。」と言つてくださったのが、大きなきっかけになりました。

活動は女の子と支援をつなぐ、支援者同士がつながる。もう一つ、支援の現場と企業をつなぐという、つなぐという活動と、何であんなことをしたのか、するのかということをやつてちゃんと学んで背景を知る、悪い子ではなくて、結構1人で戦っている子が多い。それを学ぶ。そして知つた事を広めるといふこの3本柱で活動をしています。

この活動で学んだことがたくさんありますが、とりわけお伝えをしたい事があります。私はずっと長く役所にいたので、市民活動をやってみて本当に大事な気づきが多かつた。



一つは、相談はハードルが高いということを教えられました。例えば、ヤングケアラーの問題とか、宗教2世とか、新しい問題が起こるたびに役所はまず何をやるかという、相談窓口を設けていました。それで、何となくやった気になるのですが、皆さんは多分よくご存知だと思いますが、本当に困っている人はなかなか相談につながりませんよね。

当事者の人に研修に来てもらったときに言われた言葉がとても印象的で、相談窓口、とりわけ公的な窓口のところは、相談窓口の横に大きな垂れ幕つけて、「怒らないで話を聞くよ」と書いてくれと言われました。怒ると言う、いや怒ってない優しく対応しているよと思うかもしれないけど、お説教される場所に見えるそうです。そりゃそうだろうなと思いました。怒られる場所、お説教をされる場所に見えているということを実感しなければいけないなと思いました。

一方でLINEを使ったLINE相談ですけど、相談の第一線で大学生のボランティアの後ろに、専門家が控えている形でペアで相談を受けているんですけども、ボランティアの大学生の子が、「相談してくる子は本当に偉いと思う。」と言ってくれました。「何で偉いと思うの？」と聞いたら、「相談って、自分が今置かれている状況とか自分の状態に何かの違和感をちゃんと持てて、その違和感をちゃんと言葉にする事ができて、それを見も知らぬ相談員にちゃんと伝える事ができて、そして助けてくれと頼める勇気を持っている。そこまで、1セットで全部できて初めて相談だ。」と言われて、本当にその通りだなと。相談はこんなにハードル高かったのだということを実感しました。

もう一つだけ、相談員の人たちも自分が当事者

だった子も多かったので、私が「どんな人が、どんな相談員がいい？」と聞いてみましたけど、すごくシンプルにまず悩みを悩みのまま聞いて受け止めてくれる人というのを言われました。

それからもう一つ、彼女たちに、「親や学校の先生や友達には相談しないの？」と聞いてみました。そしたら、とても面白くて、「自分たちは親や学校の先生やお友達に見せるキャラっていうのを作ってるんだ。もし、大変大きな相談事があって、それを自分が喋っちゃうと、自分の作ったキャラが壊れちゃうようなときっていうのがある。キャラが壊れると、今までのその人との関係も変質するかもしれない。そうすると、親、友達、先生が自分にとって大事な人であるほど、関係性が変わってしまうリスクを考えると相談しにくい。

だから、ちょっと距離があって、自分の相談事をしたときに、関係性が悪くなくても、じゃあもうその人には近づかない、会わないってできるぐらいの距離があって、でも信頼できる大人の存在がすごく実はありがたいんだ。」と言われて、私達が作っていかなければいけないのは、そういう関係なのかなと思いました。

小さな市民活動なので、大した事はできないですけど一つだけ我々のやったことが、相談というのではなくて、遊びに来ていいよ、お喋りしに来ていいよ、いわば居場所を作りました。まちなか保健室という名前を付けています。

ある児童福祉の専門職の方に、「学校の保健室が学校の外にあったらいいのに。」と言われて、そうかと思ってこんな名前を付けて、プロとおせっかいおばさん等で一緒に運営をしています。市民活動から大事な相談は本当にハードルが高い。居場所のような、もう少しハードルの低いつながりを作る事がとっても大事ということを教えてもらいました。

もう一つこの活動でもものすごく我々が感動したのは、企業さんが結構応援してくれるということでした。私達が応援するのは結構課題を抱えた子なので、企業さんは、あまりそういうことには関心ないかなと思っていたのですが、もしかしてと思って、多分最初に飛び込んだのがユニクロさんでした。ユニクロさんは「服のチカラ」と言っ

て、海外の難民にお洋服を届けられているので、駄目元で行って、「こんな活動しているんですけど。着の身着のまま家出している子もいて、お洋服があるとありがたいんですけど。」みたいな話をしたら、担当者がなんて言ったかという、「国内に難民がいたんですね。分かりました。」

その一言で、ずっと応援をしてもらえる。今Eコマースみたいな作っちゃったんです。企業からこれを提供できるよと言われてたら200以上ぐらいある、我々と同じような事を行っている施設に登録しておいてもらって、そこにキャンペーンのお知らせの連絡がいったら、これは欲しいとか、うちの子たちにこれ使えると思った所が必要な量だけ注文するみたいな感じで、支援が届くというミスマッチをなくす仕組みを作ってやってみました。

すごく好評で、協力してくれる企業が少しずつ増えてきていて、企業は関係ないとか企業はこういうことは関心持ってくれないと決めつけないで、行ったら良かったなと思って、これから企業とのつながりをもっと強化しようというふうに思っています。

こういう市民活動をやりながら、職場復帰をできたので、政策を作るという仕事もあの後にやらせてもらって、その中で私がとっても印象に残っているのは生活困窮者の自立支援法を作る。

後で、登壇する山崎史郎さんからお仕事を引き継いでやりましたが、このときに教えてもらったのが、生活困窮者には二つの共通点がある。

一つは、福祉の困難が重なっているということと、もう一つは社会とのつながりが切れているんだと言われました。こういうことをベースにしながら、宮本太郎先生のもとで報告書をまとめたのですが、本当に勉強になりました。

とりわけ、困窮している人を支援するときに大事なこと一つは、本人の自立と尊厳を守るというのは最初にやるべきこと。損なわれたままだと周りからいくら支援をしても、穴の開いたバケツに周りから水を汲むようなことになる。まず、自立と尊厳を取り戻すというところを目指さなくてはいけない。

それからもう一つ私が印象深かったのは、いく

らプロの人が支援をしても、その人が再びご近所とか家族とか友達とか職場とか、普通の人間関係のつながりの中に戻って行けないと、立派に立ち直ったと思った人がまた相談の窓口に残れる。つながりの再構築というのはとっても大事だということも教えてもらいました。

この流れの中で、課題解決型の支援だけではなくて伴走型支援が大事。その人に伴走しながら、その時々に必要な社会資源とつなげていくことが大事で、つなぐということが、非常に大きなキーワードになるのだとこのときに教えてもらいました。

そして、つなぎ先は地域にある全てのものが社会資源になり得ます。私が事件のときに気が付いたように、人はあるときには支えられて、あるときには支える事ができる。地域の住民も支えられる人と支える人と2種類ではなく、お互いに支えられる関係がある。

そしてその人を支える人、あるいはその人が活躍できる場所を考えていくと、例えば農業でも、工場でも、商店まちでも、ありとあらゆるものが社会資源になれるということも、このときに教えてもらい、地域共生という言葉も教えてもらいました。

本当にこの後ずっと自分の中でも、最も大切なキーワードの一つになり、実現するための重層型支援の重要性も認識するようになりました。こういう政策をやっていくときに、私は、もう一つとっても大事なと思う事があるのですが、こうやっているんなものが支え合って、暮らしていくことを考えたときに、私達はもうちょっと自立という発想も定義を変えた方がいいのではないかと。



では、私の大好きな熊谷晋一郎さんの自立の定

義を皆さんにご紹介したいと思います。熊谷教授は小児科のお医者さんで、ご自身は大きな電動車椅子に乗っておられて、依存症とか当事者研究でも大変有名な方で、彼があるときにこういうふうに教えてくれました。「『自立』とは、依存しないことではない。『自立』とはたくさんものに少しずつ依存できるようになることである」地域共生という発想を、住んでいる1人の住民の側から、言い換えると、こういう定義になるのかなと思います。

少しずつ頼るといふことであれば頼られる方もとっても楽になる、こういうことがとても大事なのだろうと。いろんなものをつながりを持っている状況が大事となると、対極にある孤独・孤立というのは大変大きな問題だ、ということになります。

孤独・孤立の法律が今年4月1日から施行されました。今日資料たくさん入れてあるのでまた見ていただけたらいいと思いますが、私が皆さんにご紹介したいところだけを伝えたいと思います。

孤独・孤立は初めて全国調査をやりました。誰が孤独・孤立を感じているか調査すると言って、私、まず単純にこう思ってしまったのですよ。男性なのか、女性なのか、年寄りなのか、若い人なのか。結論から言うと、あまり差が生まれませんでした。

むしろどんな人でも、例えば、自分の身内に不幸があった、あるいは自分が病気をした、職場で大きな出来事があった、解雇をされた、そういうことが起これば、誰だって孤立・孤独を感じるというのが調査の結果から出てきた。

独身かどうかとか年齢がどうかとか性別がどうかというので、あまり差は生まれませんでした、非常に大きな差が出たのが、相談相手がいるかどうかでした。

そういう意味では、つながりを持てるかどうかということが本当に大事なのだろうと思います。

皆さんはこういう問題よく分かってらっしゃると思いますけど、孤独・孤立は、心の問題で誰だって孤立・孤独あるし、孤独の方が好きな人もいるんだという反論が返ってくるときには、この

データを私はよくお示しをして皆さんに見てもらっています。

死亡率の死亡のリスクをどれだけ上げるかというときに、社会とのつながりが少ないというのは物凄く高リスクです。喫煙とか、過度の飲酒とか肥満よりも、もっと大きなリスクだということが言われています。

私とっても印象に残った出来事があって、もうずいぶん前ですけど、厚生労働省の健康政策の担当者がこんな話を教えてくれました。

健康日本21という、健康増進対策を日本が始めた最初の10年は非常に上手くいかなかった。じゃあ、10年何をやってたか。「栄養バランスをよくとる、よく歩く、認知機能を高める、自分の健康に自信を持ってもらう、この4本柱でやって、これでいいだろうと思って10年やってみたら全然成果がなかった。」と言って。「何が足りなかったの？」と聞いたら、「車に例えるとよく分かります。」と言われたのですが、ガソリンを満タンに入れる、車の整備をしっかりとる、性能のいいカーナビを付ける、そして運転技術もばっちりだ。5番目何が足りないと、行くところがない。

そうなのです。何のために健康でいるのか、何をやりたいから健康を保ちたいのかというそのモチベーションとかはなかった。5番目の柱を加えて、社会的なつながりという活動を入れて、次の10年からは成果が出るようになっていた。本当に孤独・孤立、大きな問題だろうと思います。何に取り組めばいいかも資料を入れていますが、孤独・孤立でいろんなチームで実践をやっている人たちが、検討してくれた中で一番大好きな資料をちょっと見てもらいたいと思います。



孤独・孤立は誰でも相談できて相談に行ったらずっと継続的に伴走支援をするというのは大事

だけど、さっき言ったように相談というのはとってもハードルが高い、それから相談に行かないと思ったときは、ものすごくリスクが高まったあとなのだ。解決にもすごくたくさんの労力を要するようになって、本当はもっと手前で早く気が付くことが大事で病気と一緒にです。この検討会でこんなふうに、教えてもらったのですが、防災と一緒にだ。地震が起きた、どこに相談に行くか誰に助けてもらうか、どこから助けが来るか、すごく大事で、いざというときのことはとっても大事だけど、起きてから準備しないでしょ。その手前で、いつも防災訓練するよね、それをやっておかないと間に合わないよね。だから、孤独・孤立も日常の暮らしの中に、つながりを作っておくことがすごく大事だと言われて、なるほど。だから今孤独・孤立は、プラットフォームを作り、日常の暮らしの中で、人と接する機会を持っているありとあらゆる分野の人が一緒に孤独・孤立の事を勉強して、自分たちができる事を何か考えて、そしてみんなで協力し合ってやるということが、法律の施行と共に始まりました。

やっぱりつながりは、いろんなことのベースになってくるのでぜひこの孤独・孤立対策も皆さんと一緒に取り組んでもらえたらと思います。

この辺が、私が市民活動とか、まず自分の体験とか政策作るときに学んできた事ですが、改めてここで人が幸せにというのは、安全に安心して生きていく上で何が重要かということを考えてみたいと思います。

私が好きな言葉を二つ紹介したいと思います。

必要なものは何か。安心できる居場所、味方、誇り、これは私よく子どもたちの支援のときに使いますが、親が、家庭が一番安心してできる場所であるのがベストだ。

でも、それができないときにはそういう場所を作るというのが、児童福祉の大きな仕事。そして親が最大の味方であってほしいけど、それができないときは、誰かが、いい大人がちゃんと味方になれる。

そして、虐待される子はほとんどが、僕が、自分が悪いから親は自分を殴ると思っている。

そうじゃない、君はいい子だ。そういうふうに

言って、信じさせてあげられるように、安心できる居場所、味方、誇りは大事なキーワードだと思うのですが、元々は小熊由紀子さんの書かれた本で、認知症のお年寄りにとって大事なもの、三つです。人にとって大事なものは、年齢に関わりなく結構一緒だなと思います。

それからもう一つは、今日のタイトルにもある居場所と出番、これは刑務所を出た人たちがどうやったら再犯をしないかというのは結構研究が進んでいて、受け入れてくれる場所がある事、そして仕事に就ける事、この二つがあると再犯が圧倒的に少ないと言われていています。居場所と出番は他の場面でも言われますよね。

一番典型的なのは、定年退職後のお父さんに必要なもの。本当に人にとって必要なものというのは共通しているだろうと思います。こういうものをどうやって備えていくか、難しいですけど、国際社会はどう考えているのかという、少しだけ見たいと思います。

SDGs、今日もしかしたらバッチ付けている人がたくさんいるかもしれません。SDGs、誰一人取り残さないと言いました。

私、恥ずかしいですけど、最初この言葉が大嫌いでした。なぜかというあまりにも綺麗事ではないかと私には思えて、できないことを目標として掲げると、かえって活動が形骸化しないかみたいな疑いを持ってしまって、最初この言葉がすごく嫌いでした。

でも、ある時にひよんなことで、日本で英語の先生をやっているカナダ人の男性に、村木さん、鎖の強さは何で決まるか分かって聞かれました。鎖を両側から思い切り引っ張ったときに、どこで鎖は切れる？と聞かれて、怪訝な顔をしていたら、一番弱い輪のところで切れるでしょと言われて、なんかすごく納得した。難しいけど、やっぱり一番弱い輪というのを放置してはいけない。でも、本当にできるか、もう1回SDGs見直したときに、賢いですよね、国連は。当たり前ですけど。SDGsは目標17あって、16までは何をやるかが書いてある。17番目だけどうやるかが書いてあるんですよ。

どうやるか、17番目にはパートナーシップとい

10/11  
fri.

開  
会  
式

基  
調  
講  
演

発  
行  
委  
員  
会  
表  
表

特  
別  
企  
画

10/12  
sat.

分  
科  
会  
A

ラ  
ン  
チ  
ン  
グ  
セ  
ミ  
ナ  
ー

分  
科  
会  
B

分  
科  
会  
C

特  
別  
講  
演

大  
会  
総  
評

引  
継  
式

シ  
ス  
ヨ  
ナ  
ッ  
ト  
ブ

う言葉が出てくる。皆でやるのだという。今日まさに協働ですよ。これが国連の答えでもあった。

これフィランソロピー協会が作っている図表ですけど、左側が今の日本の姿だと教えられました。

行政、社会課題の解決は行政の仕事、経済活動は企業がやる、そして第3セクターは大変弱い。これが今の日本の姿だから、何か社会課題が起こってそれがうまく解決できないときは行政に批判が殺到する。ここの会長さんが、「村木さん批判はね、依存の裏返しなのよ」と言われて、なるほどと思った。「私達は右側に行かなきゃ駄目なの」と言われて見せてくれたのはこれです。

行政も企業もNPO、NGOもみんなやって、一緒に取り組む、これをフィランソロピーは市民自律型社会と言って真ん中に市民を置いているのですが、よく考えると、行政の職員は市民、企業の社員さんも市民、NPO、NGOのスタッフも市民、つまり市民の課題を市民が解決する。

それぞれ属している組織の強み、特徴を生かして、みんなで解決をする。こういう姿をこれから目指していかないといけないのだろうなと思います。

私、37年半、公務員をやっていましたが、すごく反省している事が一つだけ、一つだけというか、一つだけという、あと全部大丈夫かと言われるんですけど、とっても大きな反省が一つあります。

それは何かというと、自分が公務員のときに、役所は何をしなくてはいけないか、公務員として何ができるか。これはものすごく一生懸命考えたつもりです。足りないかもしれないけど、でも、自分なりに一生懸命考えた。でも、違っていたなと。もうちょっとこんなふうにすれば良かった。

みんなで何をしなくてはいけないかというのをまず考えて、その中で役所は何する、あなたは何かしてくれる、企業は何ができる。市民団体は何ができる、あれ、ここだけ誰もやる人いないね。

そうやって皆で役割を考えて一緒にやる、こういうことをやっていけばもっと良かったなと反省しています。公務員研修行くと、皆まだ間に合うからねと言っています。



ぜひ皆さんも企業や公務員や、市民活動の分野と一緒に協働して、皆で何をするかということを考えてもらえたらいいと思います。

今日は、プロの方が多いのかもしれませんが、市民の活動は本当に大事だと最近思います。

市民の人たちは、いや私が1人動いたからといって世の中変わらないと思う人もいますが、そうでもないという例はたくさん最近見ます。一番典型的に分かりやすかったのは、島根の「おたがいさま」という有料ボランティアの仕組みを使った互助組織ですね。こういうことができますというスタッフをダーッと登録しておきます。

市民から電話がかかってくる、すいません、これに困っています。入院して2ヶ月半、どうしても24時間付き添いを付けたい。目が見えないんだけど旅行に行きたい。ペットを預かってほしい。子どものベビーシッターをしてほしい。

面白いのは、飼っている蚕の餌が足りなくなったから桑を取ってこいという、こういう注文があって、それをできる人をスタッフの中から選んでマッチングする、30分くらいとお金を取ります。でも高くありません。

私はここへ見学に行ったときに、大体、注文が来たお仕事のうちの何割を引き受けることができますかと聞いたら、すごく不思議な顔をして、いや全部、ほぼ全部と言われて、「えっ」と思ったら、2ヶ月半24時間の付き添いはチームを組んでやりました。

ときには、ここまでだからできますけどこれでは駄目ですかと聞いて、じゃあそこまでお願いしますと言ったらそれで引き受ける。私達の仕事は、困っていますと私でできることでよければを、つなぐことです。

一人一人ができることをつなぐと、たいいていの

問題が解決できるというのを、島根で教えてもらいました。

もう一つだけ、福島です。今年になって、復興住宅の調査の報告書が出ました。ネットに出ていると思うのでぜひ見てください。

5,000 戸の復興住宅に住んでいる人、全員から答えが来ました。いろいろあるのですが、このレポートの私が一番感激したところ、復興支援ですから、被災した人一人一人に被災者地域支援コーディネーターを付けてずっと伴走して支援をし続けた。

これは非常に大事でしたが、途中からこれだけでは足りないということに気が付いた。この個別支援というのは点の支援だけど、もう1個面の支援が要る。地域でどんな課題があるか、そして地域でどんな活動をしている人がいるか、そういう人、そういう情報を集めながら、今被災者の人はこういうことで困っているのだ。

こういうことをもし手伝ってくれる人がいたら、そういうことを地域のいろんな活動をしている人に伝えて、地域で活動している人同士が思いを共有して、何ができる何ができる何ができるというのを作って行って一緒に活動していく。この「面の支援」、地域を育てる支援と一緒にやるべきだと、途中から気が付いてこれを始めたそうです。

居場所と出番がある地域を作る、この一人一人をしっかり支えるという伴走的な支援と、面で地域を育てていくという、この支援が要ると思います。今日皆さん多分普段支援をやってらっしゃることも多いと思います。

プロの支援は本当に大事ですし、支援の基本でもあります。プロの人は科学的な根拠を持った支援ができる、知識や経験や技術を体系化できる。多機関連携ができる、人の家に入り込む力も生活を整える技術も持っている、こういう支援と同時に、ぜひプロの人に地域を耕すということをプロの仕事として付け加えていただけたらと思います。市民の力はすごいです。だけど、誰かがちょっとプロとしてのアドバイスをくれる、仲介をしてくれる、そういうことがあればもっと市民の力は強くなります。

ぜひ、プロも、そして地域の人たちも、一緒に暮らしやすい地域共生社会をつくるということができたらということで私の話を終わりたいと思います。

10/11  
fri.

開  
会  
式

基  
調  
講  
演

発  
行  
委  
員  
会  
表  
会

特  
別  
企  
画

10/12  
sat.

分  
科  
会  
A

ラ  
ン  
チ  
ナ  
イ  
ン

分  
科  
会  
B

分  
科  
会  
C

特  
別  
講  
演

大  
会  
総  
評

引  
継  
式

シ  
ス  
ヨ  
ナ  
ッ  
ト  
ブ

10 / 11  
fri.

開  
会  
式

基  
調  
講  
演

発  
行  
委  
員  
会  
表

特  
別  
企  
画

10 / 12  
sat.

分  
科  
会  
A

セ  
ミ  
ナ  
ー  
シ  
ョ  
ン

分  
科  
会  
B

分  
科  
会  
C

特  
別  
講  
演

大  
会  
総  
評

引  
継  
式

シ  
ス  
ヨ  
ナ  
ツ  
ツ  
ト  
ブ